

西 真如 著

現代アフリカの公共性

—エチオピア社会にみるコミュニティ・開発・政治実践—



昭和堂

2009年 320ページ

4700円＋税

「それは可能だ」。私たちも貧困を克服することが可能だという、アジスアベバのビルに掲げられた意見広告のキャッチコピーはエチオピアで流行語にもなった。だが結局のところ、市民社会の「欠如」といった、アフリカ社会に「ない」何かを見つけだそうとする議論が繰り返され、これといった解決策が見出されないまま、アフリカの人びとのあいだに困惑だけが蔓延していく。私たちは、この出口のない困惑を乗り越え、現実のアフリカ社会に「ある」問題にどのように目を向けられるようになるのか。本書はこれを出発点の問いとして、エチオピア社会で生活する人びとが、直面する社会的な排除や抑圧などの問題に対抗し、文化的な承認と経済的な格差の是正を求めて公共性を創出してきた過程を描き出していく。

本書は理論編と事例編の二つに大きく分けられている。理論編では、現代アフリカの公共性と民主主義をめぐる論争、すなわち共同体的な伝統・価値観カリベラルな市民社会か、あるいはエスニシティの承認か市民社会のエンパワーメントか、という二者択一を迫る議論を乗り越えるために提案されてきた理論が紹介される。すなわち、じっさいの社会で不可避である排除や排除される他者との対立のなかで、差異の承認と社会的正義とを視野に入れた理論(第2章)、都市と農村にまたがる幅広い「参加」を促進するエスニシティと、公正に資源を分配する「協調」を促進する市民社会とを結び付けることを主張した理論(第3章)が検討される。

そして理論編をうけて事例編では、「グラゲ」と呼ばれるようになった人びとは、じっさいにどのような公共性を支持してきたのかという具体的な経験が描き出されていく。本書で主に取り上げられる二つの住民組織、グラゲ道路建設協会と葬儀講の活動は、本書の理論編の議論と照らし合わせると、非常に興味深い。

まず、グラゲ道路建設協会の活動から検討されるのは、住民組織と国家の関係、ならびに同協会に参加する人びとの相互関係である(第6章、第7章)。同協会の活動は、エチオピアの社会構造に対して、グラゲの集合的なアイデンティティを再構成する試みであったばかりでなく、都市の市民階層と農村社会とを結びつけ、都市から農村への経済的な再配分の回路を作り出す試みでもあった。こうした同協会の活動を持続させ

てきたのは、権力の配置と資源の再配分にかかわる政治的な対立のなかで、住民組織内で利害や立場の異なるメンバーのあいだに交渉の場を巧みに設定し、その交渉を通して活動に対する住民の支持を集約してきたことであった。

つぎに、アジスアベバの葬儀講の活動では、「他者の排除」と「他者への配慮」との間にある緊張関係が問われる(第8章)。葬儀講の活動では貨幣と労働力の配分に厳格な規則が介在するが、既存の規則だけでなく、既存の規則を超えて「他者」を葬るべきか否かの葛藤、すなわち他者との境界線の問い直しが葬儀講メンバーによって絶えず行なわれてきた。

本書は、西自身による現地調査のみならず、アムハラ語資料やエチオピアの法令、グラゲ語の詩や住民組織の役員の演説など、じつにさまざまな資料を駆使した鮮やかな描写によって、読者をグラゲの人びとの経験へと誘ってくれる。これらの資料や本書の論理展開の向こうがわに、開発実務者さらには地域研究者として長年グラゲの住民組織にかかわってきた西自身が蓄積してきた「経験」を垣間見ることができ、これが本書の魅力の一つとなっている。そして、西自身の経験から培われたアフリカに対する厳しくも温かい眼差しが、第1章を「それは可能だ」と題した意図の裏にあるのではないかと思われてならない。西は「それは可能だ」というスローガンに慎重な姿勢を示してはいるが、その一方で、本書を通してアフリカの人びとを「出口のない困惑」ではなく「可能な未来」へと導く方途の一つを提示してくれているからである。その意味で本書は、開発研究や地域研究を志す若い研究者はもちろん、開発実務者を目指す若者も参考にすべき一冊だろう。そして、本書のような試みが、今後も一つでも多くなされていくことを期待してやまない。

(高橋隆太/ASAFAS)